

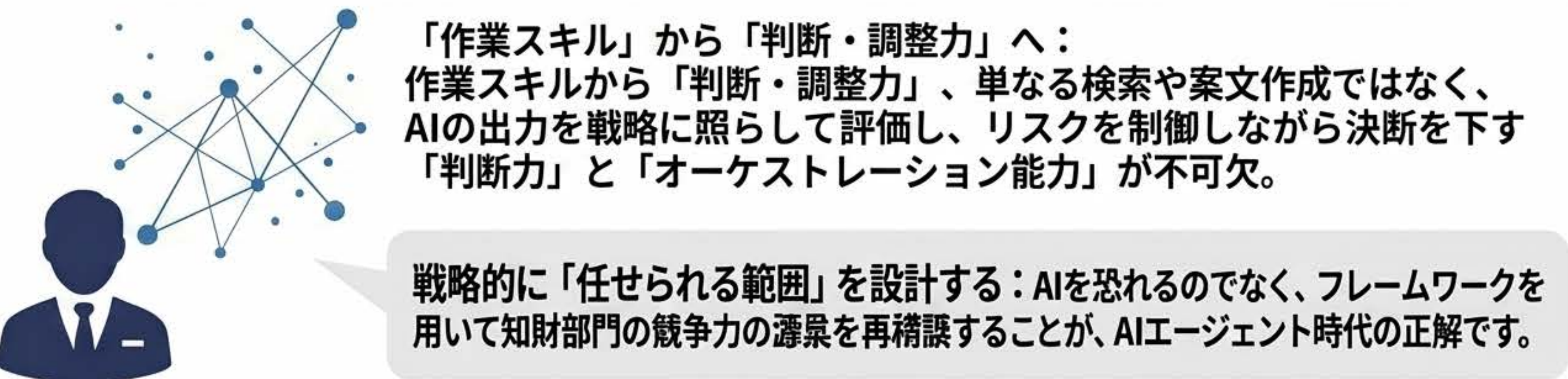
AI時代の知財業務委任フレームワーク：Can / Trust / Own で設計する次世代の知財部門

生成AIを知財実務に導入する際、リスクを管理しつつ最大限の効率を引き出すための「Can/Trust/Own」フレームワークと、それに基づく4つの委任レベルを視覚的に解説する。

知財実務におけるAI活用の光と影



結論：次世代の知財専門家に求められる役割



判断を分解する「三軸のフレームワーク」



4つの委任レベルと業務設計

	評価	案例	ガイドライン
Lv. 1 完全人間主導	Ownが極めて重く、Trustが困難	知財戦略立案、侵害判断、重要契約の承認	AIは情報提供のみ、人間が100%の責任と決定権を持つ。
Lv. 2 AI支援・人間主導	Canは高いが、Ownが重くTrust必須	明細書初稿作成、往属クレーム作成、契約リスク抽出	AIがドラフト提示、人間が必ずレビューし修正・承認。
Lv. 3 AI主導・人間検証	Can高くTrust容易、Ownリスク中程度	文献の一次スクリーニング、面接類似検索（一次）	AIが自発的に作業。人間は最終的な健全性確認のみ。
Lv. 4	Can十分、Trust不要、Ownリスク低	期限管理のアラート、公開情報のデータクレンジング	AIに完全に委任。例外発生時のみ人間に通知。